

さんむのふるさと散歩

NO.50

無形民俗文化財神楽

山武市には無形民俗文化財である神楽が6団体活動しております。

この神楽は、各地域に根づいた民衆の郷土芸能で、神社の祭礼時に神楽が奉納されています。

神楽はもともと宮廷で行われた神楽の舞で宮廷神楽と言われます。平安時代前期(貞観時代)『古語拾遺』には神楽について記されています。

古くは、江戸時代中ごろから民衆の神楽として発生し、里神楽・代々神楽として各地区に浸透しました。

前回は平成23年10月に掲載しましたその続きとなります。

今回は、成東地区の白幡八幡神社の神楽、蓮沼地区の五所神社の神楽について紹介しましょう。

【白幡八幡神社の神楽】

神社は、寛和元年(985)の白幡八幡宮勧請と伝承されています。源頼朝が平家討伐

に石橋山の戦いに敗れ安房国に逃れ、その後兵を立て直し

下総の国に向かう途上に立ち寄ったとされています。頼朝

は立ち寄った際に平家討伐のための願書と十五人の兵の矢を添えてご宝殿に白旗を奉納されたと伝えられています。

神楽は、三月十五日(現在は前後の近い日曜日)と旧暦の八月十五日(現在は前後の近い日曜日)に十二座神楽が奉納されています。

神楽の発祥は比較的新しく、明治の初めころに光町から伝えられたものとされており、稚児による御子舞がつきもので、本神社の神楽殿に



八幡大神 (はちまんおおかみ) 白幡八幡神社伝承文化保存会

て毎年奉納神楽が行われています。

皆さま、ぜひ一度は足をお運びください。

【五所神社の神楽】

この神社は承安二年(1171)に創建された古社で永仁年間(1293)領主遠山氏の寄進による懸仏をはじめとする源頼朝、水戸黄門など数々の寄進があったとされています。本殿は天正十一年(1583)に松平織部正など氏子による寄進によつて造営されました。本殿の規模は側面2間、正面5間と非常に珍しい造りで、屋根は榎茸入母屋

造りで正面の向拝は唐破風で木鼻には龍・象・虎・獅子・麒麟と言った霊獣の彫刻が色鮮やかに配されています。

神楽は、江戸時代延享3年(1746)佐倉藩藩主堀田相模守正亮が、旧領地(蓮沼地区)の五所神社に米40俵を奉納したことによるその返礼として領主の武運長久、氏子の繁栄、五穀豊穡を祈願して



秋之神 十二面神楽保存会

神官による神前で神楽を奉納したことが始まりと伝承されています。

その後大正年間に川面地区の人々に伝承され、昭和50年に五所神社神楽保存会が結成され現在に至っています。

神楽は猿田彦命の露払いから始まり、出雲大神までの10座の舞が現在は披露されています。この神楽は現在も世襲制で行われ、後継者問題は大きな課題となっているようです。

毎年2月第3日曜日の例祭に奉納されています。

☎(80)1451

さんむのふるさと散歩

左千夫短歌会

がおがおとにごる嫌味の声に鳴く影なきからす海を背の径

うちつけに大気引き裂く風の音笛のごとくにひびき渡れる

四枝の花びらをつけ白く咲く雪かぶるがごとし
「なんじやもんじや」の木
前田 一夫

予報聞き薄着となりて出てきてきぬ望む車窓のきらめく若葉
高崎ヨシ子

朝まだき窓をあければ残月が雲なき空にくつきり浮かぶ
今関 礼子

初もぎの胡瓜のトゲはするどくて黄色の花に雨のしずくが
岡本 ひで

くろしお短歌会

さし昇るけさの陽光永遠の壬辰の卯月朔日

片言を覚えし幼が散歩道すずめも猫もわんわんと呼ぶ

儘ならぬ事の多きは世の常と思いて今日のひと日暮れ行く
今関 久義
鈴木ひさよ

朱鷺の子が舞った画面に眼をこらしほつと一息命に乾杯
関島恵美子

自転車でころんでまたも腰痛め老の身ならば気をつけねばと
勝田 てる

医者通いファンデを塗って紅さしてひとり楽しむ青空の下
平野 久子

梅雨に入り建設はじまる海の家今年も来客の多からんことを
佐伯 慶一